
とある能力の存在理由（レーゾンデートル）

かぎっこまんじろー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある能力の存在理由^{レイゾンデイトル}

【Nコード】

N2577U

【作者名】

かぎつこまんじろー

【あらすじ】

とある魔術の禁書目録^{インデックス}・とある科学の超電磁砲^{レールガン}の二次創作です。科学と魔術が交差する時、物語は始まる！
PC推奨です。

第1話 戦場の入学式 開戦（前書き）

>	i	3	1	3	2	6	—	3	8	8	1	<
>	i	3	0	2	3	4	—	3	8	8	1	<

第1話 戦場の入学式 開戦

学園都市、全く接点のない場所。ましてや異能の力…超能力なんて半信半疑だったんだ…。

佐藤純平、ありきたりな名前。そして、これから青春の高校生活を送るはずのどこにでもいる普通の新高校一年生だ。今日はその青春が始まる入学式の日…。

「（・・）エッ…？」

顔文字にできるようなキョトン顔。もちろんそれは純平のものだ。

（いや…よく思い出せ、どこから間違えた？）

脳内だけ時間を巻き戻す。

……。

…。

彼は東京都の西部にある学園都市と呼ばれる超能力開発をしている都市の「外」からの入口のすぐ近くのターミナル駅でケータイのディスプレイを覗いていた。

（これは…ちこく？）

入学式の日が遅刻なんて…ついてねえ、とか思いつつ、それはな

んとしてでも避けなくては、と思い必死で目的地への電車へと急ぐ。

山梨県東部、そこが目的地だ。そして、そこにある全寮制の高校に通うことが純平にとって青春のスタート地点になるのだ。

そこに行く最短ルートとしては学園都市の地下を通る途中停車無し「外」の地下鉄を使用するというのがある。

（東京の中部から山梨の東部までわざわざ地下鉄、しかも途中で駅がないとか…学園都市はただけ日本という国家から孤立したいんだよ。しかも「外」の地下鉄は学園都市の地下鉄よりもけっこう深い所を通っているって話だし…）

と全力疾走をしながら学園都市のセキュリティの綿密さに呆れていると、やっとホームまで着いていた。

（はあっ…あつた…間に合った…）

停車している電車に乗り込むとすぐに扉が閉まり発車した。

全力力で走って来たからか全身が酸素を求めていた。そして、呼吸が整うと視線がふと車内に向く。…気付いたのだ。この車両には人が一人もいないと…。たまたまにしては異様すぎる。

（電車間違えたか…もし間違えてたら遅刻決定だよ…）

次第に妙な汗が流れてくる。

（絶対に間違えた…ついてねえ）

その確信の持てる理由は簡単だ。佐藤純平は普通の15歳男児であるが、普通すぎであるが故に極端な特徴がないのだ。身長170cm、体重60kg、顔立ちはよく「お前に似てる奴見たことある」とか言われるぐらい特徴がなく、髪はどこにでもいるような健全な黒髪だ。頭脳明晰、スポーツ万能というわけでもない。ただ、一つ言っておくのなら、彼には極端な個性だけがないのだ。そして彼にはイレギュラー且つ影の薄いどうでもいい個性が沢山ある。そう…彼のどうでもいい個性の一つ『興奮、緊張、焦燥という三つの条件下で極度の方向音痴になる』が発揮してしまっていたからだ。青春、入学式、遅刻という条件が揃ったからこそ為せた技だ。

(どーしょ…遅刻…てかこの電車どこまで行くんだ?)

発車から10分ぐらい経っているのに停車する雰囲気は一切ない。純平は最悪のケースを思い浮かべていた。

(学園都市の地下を横断…そして他県へ。埼玉か?神奈川か?ははっ!どこでもいいや…)

とある電車の中、たった一人の奇妙な笑いが響き渡っていた。

とある個性無し男が学園都市の地下で壊れている時、彼の行く予定だった学校ではないとある学校の体育館ではちょうど入学式が行われていた。

規則的に並べられたパイプいすには新入生240名近くが着席していた。基本私服の学校なので服装が統一されていないので見栄えが良くない。でも、ほとんどが制服タイプの服装のため、まだマシだろう。一方、教師は数名体育館の隅に立っているが数が少ない。

校長挨拶の時だった。右隣の席に座っている茶髪で短髪、おっとり系の小動物的な新入生の女生徒、阿波岐原奏音あわぎはら かのんと先程友達になった黒髪ロングストレートの新入女生徒、寛和藍かんな あいは自分の左目を覆うように掛かっている白い眼帯の奥でズキリと重い痛みを感じていた。

この痛みこそが彼女の“能力”ファービジョンによるものだ知らない奏音は藍の僅かな挙動の変化に気づき、

「だいじょうぶ？目、痛いの？」

そう言った奏音は、藍に「大丈夫」と言われると余計に心配を拭えなかったのか、「どう痛いの？」とさらに言ってくる。

藍にとってこの痛み自体はただの痛みに過ぎない。しかし、痛みが意味することは“死”であるというのはそれ以上の痛みである。

寛和藍、彼女は大能力レベルフォーの予知能力者ファービジョンだ。大能力者レベルフォー、軍事に用いられても可笑しくない程の能力者。

その名称通り未来を予知することの出来る能力である。その予知の媒介となるものは様々だ。彼女の場合、眼帯の奥の左目、それが能力の要だ。

未来といっても大能力程度レベルフォーでは1分程度先しか見れない。現に藍

は最大で55秒先しか見ることが出来ない。

彼女は能力の閉開が自由にできないため、左目は常時は40秒後の未来に照準を合わせている。

現在の右目と未来の左目が同時に使用されるのは彼女にとって出来るだけ避けたいものである。二つの異なる視界には重複が存在し、その重複は二つの時制が重なりカオスな世界になってしまうため、認識が混乱してしまい、結局上手く機能しないからだ。それを避け、どちらか一方の視界を認識するために眼帯をしているという訳だ。彼女の左目が40秒後見ている光景は彼女が眼帯を常に外さないという意識によって常に暗闇となっている。

そして、左目のこの痛みは40秒後の死を意味する。彼女の左目は設定した照準時に死が訪れると、目を鋭利な刃物で刺されたような痛みが発症する。つまり、藍の現状は長くても40秒後に死が訪れるというものだ。

しかし藍は冷静だった。藍は右目を一旦閉じて左目に掛けてあった眼帯を右目に掛ける。

(…左目の未来視野を40秒後から逆再生)

彼女の予知能力フアービジョンは照準を合わせる過程を利用して逆再生が可能なのだ。

38秒後に背後の窓が盛大に割れ、銃弾が飛び交っていた。30秒後にはなぜか教員達がいなくなっていた。

疑問だったがこれ以上何かを考えている余裕は無さそうだ。そう

思った藍は校長が「今から大事な話がありますので」と言っているのにも関わらず叫んだ。

「皆さん！今から逃げて下さい！！ここから早く逃げて下さい！！」

いきなり立ち上がったと思えば妙な事を言い出す藍に体育館にいた誰もがキョトンとした表情だった。特に隣に座っている阿波岐原奏音はまるで魂の抜けたように「はへ〜？」と口をポカンと開けていた。眼帯を左目に戻した藍はそれに1〜2秒遅れて気付く。その間に教職員達はその場から姿を消していた。

（空間移動！？…こんなところまで学園都市の手が及んでいるなんて…。とりあえず今はこの状況をどうにかしないと…）

どうもこれでは信憑性に欠けているらしい。次の行動は明確だった。こうなったらと藍は自分のいわゆるなんちゃって制服のブレザーの裏ポケットからメジャー且つシンプルな拳銃PMを取り出し、銃口を天井に向け、引き金を引いた。

パンツ！という銃声は藍の前言による静寂には余程響いたらしく、生徒達はざわめき、混乱し、体育館から脱出しようとする。彼女のとった行動はこの状況下で最も効率的に生徒達を逃がす方法だっただろう。

（後方からの銃撃の時間まで残り12秒）

タイムリミットを考えると、体育館から脱出するには少し余裕があるように感じられた。だが、

「藍ちゃん…それ…？」

先程友達になったばかりの阿波岐原奏音は藍の右手の拳銃を怪訝

そうに見上げていた。…そう見上げていたのだ。拳銃という凶器を持っていて藍の周りには人一人いないはずだ。現に全ての生徒は複数ある体育館の出入口から脱出していた。それなのにだ…凶器を持つている人間のすぐ隣に奏音という少女はイスに座ったままだった。

「なんでっ！？なんで逃げないの！？」

早く、と強引に奏音の手を引いた藍は全足力で出入口まで急ぐが、

(今ので時間が…いや間に合う！)

残り1秒の所で出入口に向かって飛び込んだ。もちろん一緒にいる奏音もだ。

直後、さつきまで藍達のいた場所の床やイスには無数の小さな穴ができる。そして、さらに校舎の二階と体育館を繋ぐ渡り廊下の下まで避難すると体育館から爆発音が断続的に聞こえた。その爆発音からさらに逃げるように物陰の多い校舎裏へと向かう。その途中、藍は口を開いた。

「ごめんね。こんなやり方しかなくて…。私、未来を予知できる能力でね。でも、それだけだから、あんなやり方しかなかった…」

藍の手には今だに奏音の手が力強く握られていた。だが、藍が引っ張っていた手が反発するように引っ張ってきて、二人はその場で立ち止まり向き合った。

「ううん。藍ちゃんはね、わたしを助けてくれたからいいの」

そのまま離れていってしまうと思っていた藍にはその言葉は意外

なものだった。

「あの時、なんで逃げなかったの？早く逃げればよかったのに」

藍は行動が鈍いにもほどがあると疑問に思っていた。だが、次に帰って来たのはさらに意外なものだった。

「わたし藍ちゃんが何の理由も無しにあんなことをしないと思っただから、置いてなんて行けなかったんだよ。だって友達なんだから」

そう、彼女は藍のことを友達だからといって、逃げなかったのだ。今まで友達というものを知らなかった藍にとってはその関係はどれぐらいの信頼関係にあるのかわからなかったが、一つだけ言えるのは

びんぽーんぽーんぽーん。

「開戦です。新入生の皆さんは120人になるまで殺しあっちゃってくださいーい！」

この子をこのふざけた殺し合いのゲームから守り抜こう。
これだけだ。

駅から出て、『先上シノノ高校前』とある看板の前で純平は立ち尽くしていた。

(次の電車が2週間後つて…何？これは何のドッキリ？)

とりあえず、と思った矢先だった。駅の改札口の所に宇宙服みたいな装備をした人間が立っていた。しかも、その手には物騒にも銃器を携えている。純平はこれに似たものを以前にテレビで見たことがあった。そう、学園都市の技術を駆使して作られた『パワードスーツ 駆動鎧』だ。

(どうしてあんなのがここに？)

そう疑問に思ったが、それどころではなくなった。『パワードスーツ 駆動鎧』が携えている銃器の銃口が純平の方に向いているのだ。

直後、そこから銃弾みたいなものが放たれた。純平は回避しようとしたがいきなりのものでそのまま体のバランスを崩して、アスファルトの地面に手を着いてしまう。

(？)

その銃弾は純平に当たることはなかった。その純平の頭上を通過し、道路で駅と反対の場所に隔てられている『先上高校』と彫られた校門に着弾し、激しい爆発を起こしていた。だが、今のは外しただけなのだろうと予測した純平は『パワードスーツ 駆動鎧』が銃器に何かを装填している間に壊された校門によって巻き起こった砂埃に向かって走った。砂埃でなんとか狙いを定められないようにするためだ。

純平は先上高校の敷地内へと入って行く。敷地内には林があったので、次はそこに行こうと考える。

行動ばかりが先立って思考が追いつかない。

純平は逃げ続けた。自分の近くの木が何回も爆発で倒されていっ

た。それでも純平はさらに危険が待つ場所へと向かっているのも知
らずに先上高校の奥へと足を進めていた。

第2話 戦場の入学式 それぞれの死闘前

ぴんぽーんぱんぽーん。

『開戦です。新入生の皆さんは120人になるまで殺しあっちゃつてくださーい！…これだけではわからないですか？では、第1回特別実践能力開発のルール説明をします。現在、先上高校の新入生は240人、その人数が半数になるまで殺し合ってもらいます。また、皆さんお分かりの通り、今この先上高校の周辺の町には複数の学園都市製の試作品である軍事兵器を徘徊させています。それらは迷いなくあなた方生徒の命を狙います。死にたくないのならなるべく早く半数になるよう努めて下さい。あと、この町から逃げるなどと考えた者には安らかな死が待っていると考えてください。さて、皆さん死なないように頑張ってくださいーい！』

そんな放送が先上高校だけではなく、その周囲の小さな町にまで流れる。

町にいる人間は誰もが聞いたであろうその放送にその場にいるのにもかかわらず全く気付きもしない人物がいた。西堂宏平、彼は先上高校の一年生の教室で椅子にもたれながら気持ち良さそうに寝ていた。もちろん、彼は新入生で違くない。ただ、彼が今いるべき場所は入学式が行われている体育館、しかし彼は一人教室にいる。…そう、彼は入学式前のHR中に寝てしまい、それから誰にも起こさず今に至っている訳だ。が、彼のその心地好い眠りを覚ますかのように彼の体を揺さぶる手があった。

「…もう…ちょっと…ねむ…」

「いい加減に起きませんか！」

いくら揺さぶるつと起きようとしないので、その手は西堂の頬を思い切り抓る。

「うっぷす！」

「起きましたか？」

「…ええと…誰すか？」

「見覚えのない女性がいた。ここの生徒だろうか？いや、思い出した。この人物から感じるオーラは…」

「あつ！国民的アイドルグループAKE46の…！」

「はあ…よく似てる人がいるとは聞きますけど違いますよ」

寝起きだったせいだろうかよく見ると違う。じゃあ誰だ？何か知ってる。このキリツとした顔立ちと腰まで伸びている茶色い髪、それに…何か背中に背負ってる？2mくらいの槍の刃の根元付近に斧状の刃と鉤爪状の刃が対極しているような武器だ。

（なんていうんだっけこれ？たしかハルバード…）

「ああ、あんたが皆元慶みなもとけいか…」

「やっと思い出してくれたようですね。この学校の生徒達を救済す

るには僅かでも協力者が必要ですから。だからあなたはどうか死な
ないで下さいね」

(…ついてねえ！何なんだよ、これ！)

純平は林の中を駆けていた。4機の駆動鎧パワードスーツに追われながら…。そ
して、林を抜けると体育館が見えた。その体育館はまほとんどの窓が
割れとても何か起きていないと言い難い状況だった。だが、その
原因を考える余裕も純平にはない。4機もの駆動鎧パワードスーツに追われている
のだから…。ふと背後を見る。

(いない…?)

体育館前まで来た時にそのことに気付く。突如、近くから連続的
な銃声が響いた。

(方向は体育館と校舎の2階部分を撃いでいる渡り廊下の下辺り…
もしかして人が撃たれた!?)

突然の出来事だった。

(くそっ！関係ない奴巻き込んだ！)

恐怖も躊躇いもなかった。行った所で何もできないかもしれない。
それにまだ駆動鎧パワードスーツがその場に残っていたとしたら、それこそただの
無駄死になる。それでも純平は自分の過ちを悔いて、その場に向
かうことしか頭になかった。

純平は渡り廊下の下まで走る。

(……！)

惨状だった。人が十数人も倒れていた。辺りにはまだ鮮やかな血が散乱していたが、純平にはその血が鮮やかには見えなかった。ただ、辛かった。即死だったのだろうか呻き声すら聞こえない。倒れている人達は全員死体。そう考えた瞬間、胃の中の物が逆流するのを感じた。口の中に胃液とほどほどに分解された食物達が流れ込む。だが、実際はそこまでだった。そこで堪えて逆流してきた物を再び飲み込んでやった。今はまだやることがある…。

(まだ生きている人はいるはずだ！)

幸いにも駆動鎧パワードスーツの姿はなかった。血まみれの中、一人一人確認していった。一人ずつ見ていく度に吐き気に襲われたがそれよりもこれだけの死に対して自分が何も出来なかったことの悔しさの方が強かった。

…。

(10人目……)

10人目の死を確認した時だった。呻き声が二つ程聞こえた。

一つはまだ息を確認していない(恐らくは亡くなっている)人の下敷きになって倒れている小柄な男。もう一つは渡り廊下のすぐ下にある体育館の扉の内側にいたゴツイ体型の男だった。どちらも制服を着ている。違う制服だが同じこの学校の生徒なのだろう。服装が指定されてないとかで。小柄な男の方は奇跡的にも無傷、ゴツイ方は銃弾が貫通したのか右の太股から血を流していたが命に別状は

ないようだ。小柄な方と協力して、ゴツい方の応急処置を行う。

もう一つ呻き声が聞こえた。と思っただけで途絶えた。まだ確認をしていない人がのこっていた…。その呻き声を出した人は体育館の角を曲がったすぐその角にもたれてぐったりしていた。だが…もうすでに亡くなっていた。誰か助けが来るまで必死に息をしていたのだろう。間に合わなかったのだ。

「くそっ！」

純平はただその場で消えていく命に対して何も出来ない自分の無力さに腹が立った。あまりの悔しさで声に出してしまうほどに。

「君は悪くないよ…」

いつの間にか着いて来ていた小柄な方が呟いた。

「いや違う…俺がここに来なければ…！」

「だから君は悪くないんだって。放送聞いたろ？」

「放送？」

純平のその疑問に小柄な男は驚いた表情。

「この生徒だよね？」

「いや、違う。それよりもその放送ってどんなだった？」

小柄な男は何故か一瞬キョトンとするが純平にその放送の内容を話した。

信じられない話だった。普通の人間にすることじゃない。

「それで、どうもこの生徒全員が学園都市出身らしいんだ」

小柄な男が続ける。

「ここからは推測だけど、たぶんこの施設は何らかの形で能力者を利用してある学園都市公認の施設だと思う。こんな広大な土地が学園都市にばれない訳がない。僕らは利用されてるんだ…」

「でもさあ、俺、学園都市の人間じゃないけど」

純平は呟く。

「…。それはよくわからないけど、なんでもそもこんな所に？」

「ちょっとしたスキルが発動しただけだ…」

電車を間違えちゃってー、なんて恥ずかしくて言えない。話題を変えよう。

「ところでこれからどうする？俺はとりあえず駅まで逃げて電車で逃げた方がいいと思うけど」

「それは無理だと思うよ。放送の通り、この騒動の元凶は何か仕掛けているはず」

（そっか。そういえば電車の本数が極端に少なかったな…）

「じゃ、つまり120人になるまで逃げ続けると…？」

小柄な男は小さく頷く。

「そっか…」

補足説明のような放送が流れてから1時間程経過していた。校舎裏も完全な死角ではなかった。重火器を大量に積んだヘリからは逃れられるが、どうやらそれ以外にも無人の駆動鎧が町内に複数徘徊しているようで、ヘリの死角を埋めるようにその駆動鎧が巡回しているため、藍と奏音は校舎裏から離れ、体育館裏へと移動していた。そこには駆動鎧はいなかった。というよりさつきから二度の爆発音の後以来ヘリや駆動鎧を見かけない。しかし、その代わりに現れたのは二人のチンピラみたいな生徒だった。今、藍と奏音はその二人に挟まれている状況だ。

「あんまし女の子虐めたくねえんだけどなあ」

金髪のツンツン頭の方が面倒臭そうに呟く。

「他の奴らもこうしてるんだから仕方ねえだろ。オレらが生き残るにはこれしかねえんだ！」

赤髪の毛先遊んじやってる方が怒鳴る。

この状況、藍だけは自分達が数十秒後どうなるか予想…正確には予知出来ている。二人の男に囲まれてから藍の左目は痛むばかりだ。

(さっきの放送…そういう意味で言ったの!?)

(それにしても…ここからどう未来を変える?)

「とりあえず、まずはあのへりを無力化しましょう?」

西堂と慶は三つある校舎の内グラウンド側の校舎の屋上にいた。そこで慶がいきなり無茶苦茶な提案をしている所だ。

「…俺つか?いや、俺結構万能な能力ですけど、そんな火力ないんで無理ですけど」

「そうですか」

では私がやりましょう、と言うかのようにハルバードを両手で強く握り締める。そして…

「…?投・げ・た…?」

そう、慶はハルバードをブーメラン感覚で軽々へりに向けて投擲したのだ。

「まさか…これでへりが両断なんて…。…マジかよ…!」

見事にグラウンド上空に飛ぶ金属の塊を縦に真っ二つ…とまではいかないがへりの下部を大きくえぐっていた。それがエンジン部分に達したのか、直後大きな爆発が起きる。

「うわっ！なんか戻って来る」

やはりブーメラン感覚だった…。ハルバードが目的を達してブーメランのように帰還してきた。そして慶が横に回転しながら帰還してきたハルバードをタイミングよくキャッチ、とまでは行かず、掴めたが勢いを殺し切れず、慶の左後ろにいた西堂にその斧状の刃が向かう。西堂はとっさの判断で頭を下げる。頭上をぶおんと裂く音。

「ちょ、危ないじゃないですかー！」

「てへっ」

「てへっ、じゃないですよ！もう少しで首飛ぶところでしたよっ！」

（変わった先輩だなあ…）

西堂は一つ大きなため息をした。

純平達は一番グラウンドから遠い校舎の一階の保健室でゴツい方の男の担当をしていた。

「よし、これで少し楽になったはずっ」と
「悪いな…」

手当を終えるとゴツい男が済まなそうに言う。

「いいよ、俺の勝手だし」

手当を終えた純平は立ち上がり扉に向かおうとする。

「どこに行くんだ？」

ゴツい方が怪訝そうに言う。

「ちよつとな。討伐クエストにでも」

「あれを破壊するってこと？」

ゴツい方が体を横にしているのとは別のベッドに腰を掛けている小柄な方が言った。

「いい方法を思い付いたんでね」

「止めた方がいいよ」

「…それはつまり120人になるまで人が殺されるのをただ見てるってことか？」

小柄な方は首を横に振る。

「一人でやるのは止めろってことだよ」

純平は驚いた。それは自分の考えた方法が危険で命懸けになるかもしれないのに彼がその方法に殺人兵器に立ち向かうのに協力しようとしていることに。

「…わかった」

そこに彼なりの何か強い意志を感じた。そんなものを純平には否定出来なかった。

「俺も出来ることならやる」

ゴツい方が上半身だけ起こして言う。

「俺達はこう見えても能力者だからな。何かに使ってもらいたいものだ」

「出来ることって…何だよ…そんな足で」

「レベルスリー サーマルハンド 強能力の定熱保存。触れたものの温度を遠くからでも調節し続けられる。5 ～ 70 が限度だが…」

「僕はレベルフォー クリアポイアンスの透視能力。人に能力を付与したりも出来る」

純平にとって能力者は盲点だった。しかし、現状どちらの能力も戦闘向けじゃなそうだが、閃いた。

「…わかった。もっといい方法を思い付いた」

純平がやっと納得し、二人も納得顔だった。

「そついえば名前言ってなかった…。俺のことは純平って呼んで欲しい。苗字とかはなんか被りそうだし」

(多いもんな、佐藤)

二人も名乗った。小柄な方は大西^{おおにし}、ゴツい方が小南^{こみなみ}。

「じゃあ、やるぞ。大西、小南！」

第2話 戦場の入学式 それぞれの死闘前（後書き）

おそらくタイトルとかちよくちよく変わるかもしれないです。

第3話 戦場の入学式 あの空のよつば(前書き)

第3話 戦場の入学式 あの空のように

純平は今グラウンドと体育館の間にある階段を駆け上がっていた。

「はあっはあっ…殿しんがりはつれえー！っと大西、お前から見える範囲では奴らの状況は？っ」

純平は校内を奔走していた。一定速度で走り、ぎりぎり気付かれている程度で駆動鎧パワードスーツから逃げるといふ繊細な作業をしているからか、疲労と緊張で喉が乾き切っていた。唾を飲み込む。三体もの駆動鎧パワードスーツに追われている。

「見える限りでは今そっちにいるのが三体、前方の第二校舎1階西…体育館側に一体。グラウンド中央に一体、東部に一体、校門前の林に三体、第一校舎5階に一体、第三校舎裏西に一体。そのまま後は第三校舎の西昇降口へ向かえば第二第三校舎側にいる駆動鎧パワードスーツと遭遇するから気をつけて。それとへりだけどさっきの爆発でやっぱり壊れてた…。たぶん僕ら以外にもいるんだよ」

電話越しに大西がオペレートする。それを息を切らせながら純平は聞いていた。

「…わかったっ」

疲労でその程度の返事しか出来ない。

(それにしてもやけに疲れる…。やっぱ坂とか階段とか多いからか

…)

先上高校は小さな盆地の町に位置している。そして、先上高校はその端にあり、南から北にかけて斜面に位置しているため階段などが多い訳だ。ちなみにグラウンド及び第一校舎から第三校舎は南から順に建っているため段違いになっている。そのため各校舎を繋ぐ渡り廊下は第一第二校舎間では4階3階、第二第三校舎間では3階2階、東西中央に三つづつ架かっている。大西と小南は校内で最も高い場所である第三校舎の屋上で待機している。その方が大西にとって能力を使い易いからだ。

「それにしても超人的な視力だな…」

『まあ、一応能力者っていう観点では超人かもしれないね。でも、どうもこの目の良さは例外みただけど…。ん!?!』

「どっしたっ!?!」

急に大西が驚いたので彼らが襲撃されたと思った純平だが、それはどっやら違うらしい。

『朗報だよ！何だかわからないけどグラウンドの駆動鎧パワードスーツ二体と林の方の三体が破壊されてる…!』

「マジかよ!?!って出てきおったなっ」

喜んでいる場合ではなかった。会話している間にも純平は第一目的地の第三校舎西昇降口近くまで来ていて四体もの駆動鎧パワードスーツに追われていた。銃弾が届かないのは大西に付与された透視能力クリアボイアンスに付属してきたもののせいなのか視力が大西程ではないが良くなっていて、相

手の位置を早く察することが出来たためだ。逃げ足が速くなった訳ではない。だから、例えば目的地に先に駆動鎧パワードスーツがいたりなんかすると…

「やっべー！」

呑気に会話なんてしてられない。

(どうする…ヤバいぞ…純平さん焦りまくりだよ…ほんとヤバい！)

そう思った直後だった。目の前クリアポイアンス(透視能力とその付属能力によって割りとは近くはない程の距離が目の前に感じるだけ)で何か筒状の物が駆動鎧の足元に転がって来た。疑問に思う前にその筒状の物は起爆した。当然煙で駆動鎧の姿は捕らえられないはずだが、今は違う。クリアポイアンス透視能力がある。爆煙の中では所々損傷しているもののかろうじて作動している駆動鎧パワードスーツが純平とは異なる方向を向いて動き出していた。

(何だ？誰かいるのか？)

しかしその誰かを確認している暇など純平にはない。そのまま駆動鎧パワードスーツのいなくなつた爆煙を通過して、目的地に足を踏み込む。そして、一度振り向き後方数十メートルに四体の駆動鎧パワードスーツがいることを確認。第二目的地へ向かう。

(ここが正念場だっ！)

やることは一つ。今いる第三校舎一階西から東の突き当たりにある化学室近くまで全力疾走だ。

(じゃ、行くか)

純平は一度呼吸を整えて走り出した。

西堂は慶とは別々に行動していた。役割分担というやつだ。慶はグラウンドの駆動鎧パワードスーツの無力化、西堂は生徒の救助。今は第三校舎の近くにいる。

「さて降りてみたはいいものの、校内に生徒さんいんのかねえ。それとさあ…こんなん渡されてもなあ…まだ慣れてないだよなあ」

彼の持っているもの、それはいわゆる拳銃という類の物と手榴弾という類の物だ。言い換えると武器である。

「まあ、そこら辺歩いていて敵とばったり遭遇なんてドラクエじゃあるまいし…ってなんかいたー！」

駆動鎧パワードスーツ一体が現れた(前方十数メートル昇降口前に)。コウヘイはどうする？

戦うと見せかけて逃げる

見なかったことにして逃げる

先輩を呼ぶために一旦逃げる

(一択かいつ！)

昇降口近くにある焼却炉に隠れ、駆動鎧パワードスーツの様子を窺う。どうも駆動鎧は西堂に気付いていないようだ。

(ん?)

どうやら選択肢以外の行動をしなければならぬらしい。少年Aが現れたからだ。少年Aはグラウンドからこちら側に向かって走っている。このままでは彼はあの駆動鎧パワードスーツとエンカウントすることになる。当然その際は1ターンで死亡だろう。

(こっちはいらぬなあ)

さてどうする?

戦う

道具

逃げる

(もちろん逃げるはない。だったらここは戦うだな…。っとその前に『道具』で装備を確認…)

- ・モブ制服一式フレザー 防御力+0ただの制服なので防具としては機能しない・モブパーカー(水色) 防御力+0
- ・チャラさ+11 ただのパーカー。ワイシャツの上に着用することでチャラさ上がる。コニクロ製品。
- ・ベレッタM92F「ハンドガン」
- ・攻撃力+125
- ・手榴弾×2

使用すると相手グループ全体に500前後のダメージを与える。

(手榴弾強え!てか何だよモブって!まあ、俺見た目完全モブキヤラだけどさあ…。俺がモブなのは良いとして、このパーカー色々な

意味でヤバいぞ！)

突っ込み所の多い装備の説明だったが、西堂は手榴弾を手に取り、ピンを抜いて駆動鎧パワードスーツのいる方向に投げた。手榴弾の火力で駆動鎧パワードスーツを完全に無力化するのには難しいが、この状況で少年Aが駆動鎧パワードスーツとエンカウントしないようにするには、まずは駆動鎧パワードスーツが少年Aに気付く前に気をこちらに向けることが最良だと考えた西堂は出来るだけ初手で敵に損害を与えるために手榴弾を選んだ。そもそも拳銃の火力では傷一つ付きそうにない。

放物線状に投げられた手榴弾は駆動鎧パワードスーツの足元に転がり炸裂した。爆心地周辺に爆煙が舞う。どうせ無力化は出来ていないだろうと見ずとも分かるため、西堂はその場からいち早く離れることにした。

「やっ、と」

皆元慶は呟く。彼女は第一校舎の屋上で一仕事終えたように右手で額の汗を拭っていた。彼女はたった今、グラウンドにいた駆動鎧パワードスーツを二体無力化した所だ。

「……」

空を見上げる。空はいつもと変わらずそこにあっただ。でも、この空は変わり続ける。存在はし続けるが姿は変わり続ける。何もかもがこの空のように自動的に変わればいいと思う。でも、何もかもがこの空のように自動的に変わらない。誰かが変えなければならぬのだ。

ふと、何かを感じる。幾度も感じたことのあるものだ。これで何
度目だろうか。そこにあるのは彼女のしなければならぬことだ。
為すことが出来るか出来ないかは彼女の意志にはすでないかもし
れない。ただ、彼女は行かなければならない。再び意志を固める。
これも何度繰り返したことだろう。ふと、気付く。手元にハルバー
ドがない。グラウンドに視線を向ける。どうやら探し物はパワードスーツ駆動鎧に
減り込んでしまったままらしい。

「取りに行かねばなりませんね…」

ただ、まずその前に彼女にはすべきことがある。彼女にとって得
物があるかどうかは余り問題ではない。彼女にとって得物よりも強
い武器は別にある。彼女は踵を返してその場から彼女の居場所へと
向かう。自分だけの意志（パーソナルリアティー）という武器を
持って。

「ぬうおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおお！！」

第三校舎一階の廊下を大音声で翔けているのは佐藤純平というモ
ブ男だ。彼が向かっているのは化学室手前。そして、そこまでの距
離は残り50m。化学室には行かずに東昇降口から外へ出る。そう
すれば目的は達成される。後50m、純平の後方数十mに四体の駆パワードス
動鎧が銃器をぶら下げながら追って来ている。その距離が10mに
もなれば射程範囲内に入っしまい脳天を撃ち抜かれるだろう。だ
が、こんな無謀な挑戦をする程純平も馬鹿ではなかった。少しでも

相手の進行を遅らすために、あらかじめ小南の能力によって人の体温に等しい温度に保った心肺蘇生法練習用マネキンを随所に配置していた。どうやら大西曰く、この種の駆動鎧は無人で、また人間の形をしていて30 強の物体を人間として認識するようになってい
るらしい。思惑通りマネキンが立ち塞がる度に駆動鎧はそれらを人間と勘違いし、容赦無く風穴を開けていく。そして、その分の時間が純平の逃げる時間に足される。

とうとう最後のマネキンが立つ地点を通過した。彼らにも一人一人名前というものがあつた。廊下に配置したマネキンは三体。生堂佳久保、信相正次、新杯颯成。

(ありがとう…そしてさようなら…。佳久保、正次、颯成…)

純平は走った。彼らの分まで。そして、彼らの尊い犠牲によって純平は東昇降口から出ることに成功した。

もう少し化学室から距離をとるべきだと思つた純平は第二校舎一階の開いてる窓を見つけ、その室内に転がり込んだ。そして先程からずっと通話状態だつた携帯電話に向かつて言う。

「大西！」

『了解！』

この合図はただ大西達に遠隔的に化学室の扉を開けさせることを意味する。また、それにより化学室の出入りが一時的に可能になる。駆動鎧は今だに純平に追いついていない。いや、標的を変えたといつたところだろう。純平は知っている。あの惨劇から知つたのだ。そう、あの時も純平は追いかけていた。そして駆動鎧は急に標

的を変更した。より多くの人間をより効率的に殺すために。所詮は無人でプログラム通りにしか動けないがために行動パターンが読まれやすい。純平はその行動パターンに賭けてみたのだ。そして、駆動鎧は純平の計画通りに多数の人間：いや人の体温に保たれたマネキン達が待つ密閉された空間に向かう。大西の能力付与でそれらのアクションが純平には見通せる。

『じゃ、閉めるよ』

先程まで純平を追っていた全ての駆動鎧が化学室に入るのを透視した大西が電話越しに確認を取る。

そして化学室という巨大な水素爆弾は獲物を捕まえて密閉された空間になる。水素を発生させるぐらいどこの高校生でもできる事だ。ましてや機材や薬品が十分に揃った化学室ではそれ自体を一つの化学兵器にする事だって可能だ。

（これで終わりだっ！どこの誰がこんな事を企んだのかは知らないが、そんなモンで俺達を殺せるかよっ！）

駆動鎧がマネキンに向けて引き金を引いた。その瞬間が純平の宣戦布告だった。

第3話 戦場の入学式 あの空のように（後書き）

「次回第一章完？ 駆動鎧が弱いのは試作品だから（言い訳）。

第4話 戦場の入学式 とある奮起

第一校舎四階…。

「……？」

廊下は所々焼け焦げていた。慶は駆動鎧パワードスーツが携帯している重火器の放射の痕跡と考えるのが妥当だと思った。

(でも何故このような拡散したような焼け方を…?)

そう、もし駆動鎧パワードスーツの仕業ならば“所々”という焼け方はしない。彼女の推測では今校内にいる駆動鎧パワードスーツは学園都市外の販売を目的としたもので、スペックは本来のH S P S 15 駆動鎧パワードスーツとは格段に落ちているが、その代わり無人という事を売りにしている。そして今回のこの騒動はその駆動鎧パワードスーツの運用試験を兼ねたものだろう。無人、つまりプログラム通りでしか動けないはずのこの駆動鎧パワードスーツの動作上、この焼け跡は本来起こり得ない。

疑問の振り切れない慶だったが足取りだけは向かうべき場所に向かっていた。

その足が止まったのは同じ階にある他校舎と東西中央と階別に繋ぐ渡り廊下の内、第一校舎三階と第二校舎四階を繋ぐ中央の渡り廊下だった。無論、足を止めたのには訳がある。渡り廊下が今まさに炎上しているからだ。渡り廊下のその一画だけがオレンジ色の光を燈している。火はそれほど拡がってはいないが、放って置く訳にはいかない。何しろその渡り廊下の脇に一人の女生徒がいるからだ。その女生徒は体育座りでうずくまっていた。

(色々と思いたくないものを見てしまったのでしょ…)

慶は死者ではなく生存者を見つけられた事に歓喜もした半面、また一人心に大きな傷を与えてしまった事に悔しさ覚えた。

(PTSDになってなければ…)

そう願いながら鎮火活動が始める。だが、この鎮火活動は少し様子が違う。「始める」という表現が合っているのかどうかも疑われる。そう、彼女がその場で座標を演算するだけで火は一瞬で鎮火されたからだ。

「……！」

消火してみても慶は初めて気付いた。渡り廊下の至る所に金属が半田付けのようにへばり付いている。量からするとあの駆動鎧パワードスーツに使われている量に近い…。

(まさか…)

ここで確信するのは容易だった。

(この金属が鉄だったとしても、その融点は1500 近く…この渡り廊下がその温度に耐えられる筈がない。ましてやこの子は…)

慶は渡り廊下の脇で身を丸めながらうずくまっている少女の方を見つめた。

(この子の能力でしょうね…)

よく見てみるとその少女の着ているのはあの超電磁砲や心理掌握
といった超能力者が在籍していると有名な常盤台中学の制服だ。常
盤台中学の入学条件には強能力以上である事というものがある。つ
まり、この女生徒は少なくとも強能力者…。

(1500 もの発火能力、これは大能力ぐらいでしょうね)

これからどうするか迷っていた慶の耳に突如凄まじい爆音が届い
た。

(次は何!?)

場所は第一校舎の東というところだろう。

(本当に今年の新入生はどうかしているんですか…?)

慶は第二校舎三階と第三校舎二階の間の渡り廊下まで行って、窓
を開けてその現場を見て、そう思った。

(入学早々これだけ出来るなんて…)

爆発の起きた場所であろう教室はその原形も留めておらず、建物
の損壊は一つ上の階にまで及んでいる。目を凝らすとその損壊した
教室の瓦礫の中に埋もれて複数の金属片が見えた。それは駆動鎧に
使われているものだ。量から考えて少なくとも三体分はあるだろう。

(…とにかく…)

再び渡り廊下にいる例の少女に視線を戻す。

(こちらが先ですか)

「あっ、バッテリー切れた…」

校内にいる駆動鎧バワードスーツが全て排除された事を電話越しに大西から聞いた直後に純平の携帯電話のバッテリーは切れた。

(まあ、とりあえずしばらくは安全だろうし大丈夫だろ)

携帯電話を制服のポケットに入れる際、何かが無いと感じた。もう片方のポケットに手をつ込む。

「……財布落としたあーっ!!」

その財布には純平の全財産が入っている。純平は本日何度目かになるが、ついていないとただそう思った。

(たしか…この学校に来た時はあったよな…)

全財産が失われようとしている、そう考えるだけで純平の表情は焦りに満ち溢れた。純平は当ても無く走り出した。

「やっと片付いたなー」

西堂はぐしゃぐしゃに変形した駆動鎧パワードスーツの残骸を見下ろして呟いた。
(手榴弾二発で動かなくなるなんてな。まあ、どうせスペック落としたやつなんだろ…)

どうでもいいかのようにそう思っていると携帯電話のバイブレーションが西堂の太股を制服越しに刺激した。

「うおっと、お慶さんかつ…」

最近、携帯電話の機種を変えた西堂だが、どうもこの携帯の「こそばゆいバイブでしたっけ」かり着信に気付ける!というスローガンの所以となったバイブレーションには慣れておらず、毎度こそばゆさを感じている。

「はいっ」

『どうでした?』

「はい?」

開口一番に「どうでした?」と言われ、何の事だか思い出すのに少し手間取った。

「あー、たぶん問題無いですよ」

さつき少年Aを助けた事の満足感からか適当に受け答えする。西堂にとってあの駆動鎧パワードスーツ一体を無力化したという事は大幅な進歩であり、余韻を残すぐらいの満足感を与えていた。

『…“ たぶん ”ですか…』

小さく呟くように慶は言った。それは電話越しでもよく伝わった。西堂の言動から多少の怒りを覚えたのだろう。慶の命じた事の重要性を物語っている。

「ワードスーツ 駆動鎧や一体殺つといたんで大丈夫ですって！」

西堂はこれ以上慶を怒らせまいと必死に言い訳をする。

『これだけかかって一体だけ…まあいいでしょう』

見逃された。しかし「一体だけ」と言われた辺りで西堂の今の満足感が全て失われた。

（つかこの人もこの人だっ！さっきなんて「てへっ」「とか言うてからな！人に言うておいて自分はどうなんだ！？）

上司に対しての愚痴だった。

『ところでお願いがあるんですが校庭にある霊装を持って来てくれないですか？こちらは手が塞がっています』

「霊装？…ハルバードの事ですか？」

『はい、そうです。こちらの位置情報はGPSで随時そちらの携帯電話に送信されるので確認して下さい』

言い終わると電話はそれで切れた。

「結局パシリか…」

そう呟いたが、まあいいか、と開き直り校庭に向かった。

屋上から続く階段を今にも倒れそうなくらいよろよろと降りている凸凹コンビがいた。無理もない。身長が180cm後半ぐらいで、俗に「ゴリマッチョ」と呼ばれる体格の大男を身長150cmあるかも分からない、俗に「男の娘」と呼ばれても違和感の無いぐらいの童顔で小柄な男がその大男の怪我をした右足を支えるようにして一歩一歩慎重に降りて行く。この体格差で支えられている事が不思議なくらいだ。

彼らはずい先程、とある作戦に成功していた。だが、歓喜する程事態は好転した訳ではなかった。作戦終了直後、大男の小南の容態は突然悪化し始めた。原因は恐らく駆動鎧パワードスーツの銃器に用いられていた殺傷性の高い弾丸を撃たれ、その上先程の能力使用時の一時的な脳の活性化による血圧の上昇によって出血量が多くなったことだろう。そもそもこの怪我で能力を使用する事自体が困難であるはずなのに、小南は自分の能力を許容範囲ぎりぎりまで使っていた。この状況もそれで説明がつく。小南は今、意識が朦朧としているぐらいだ。

その怪我にとって移動しない方が良くとも考えた小柄な男、大西だったが、それでは自体が悪化する一方で何も解決しないと思い、結局何か行動することにした。

とある作戦に参加していたもう一人の人物である佐藤純平との合流を試みることにした大西は作戦中からずっと純平の携帯電話と通

話状態になっていた彼の携帯電話で純平に現状を伝えようとしたが、純平の携帯電話のバッテリーが切れたのか通信は途絶えていた。とりあえず校舎の外にいと考えた大西は小南を連れ、校舎から出ようと考えた。

大西の体力もどこまで続か分からないが、やっと彼らは他校舎との間にある渡り廊下のある二階まで降りていた。

「…？」

第三校舎と第二校舎の渡り廊下の先第二校舎と第一校舎の渡り廊下に人影が見える。大西は疑問に思った。そう、その人物は平然と電話をしているのだ。

そんな事を考えている内いつの間にかその人物も通話を終えたと大西達の存在に気づき、大西達を見つめていた。

大西は能力とは関係なく超人的視力を持っている。だから見えた。その女性が見せた一瞬の笑みが…。それは大西がこれらの惨状までずっと手放す事なく向けられてきたものと似ていた。

時間が止まった気がした。

今まで溜め込んでいた気持ちが溢れだした。

それは視界を遮るように流れ出した。

もう取り戻せない大切な人を思い出した。

(…いや、まだまだ。まだ堪えないと…)

そう自分に言い聞かせ、大西は奮起する。それでもずっと小南を支えていた大西の体は力が抜け、バランスを崩し小南の巨体ごと廊下に倒れそうになる。

それをその彼女が両手で軽々しく受け止める。左腕には大西、右腕には小南という形で。

「っと、大丈夫ですか？」

彼女は受け止めながらそう言った。そして小南の怪我に気付いたのか、大西を受け止めた左腕を離し、小南のその巨体を突然背負い出した。

「……………」

大西よりも二周り以上大きい彼女だが、それよりもさらに二周り大きい巨体を担いでいることに大西は啞然とするしかなかった。

「あの…」

彼女の意図が読めない大西は言い淀んでいた。

「ああ、自己紹介がまだでしたね…」

彼女は巨体を担ぎながら平然と喋る。大西はそういうことを聞きたいわけでもなかったが、また言い淀んでしまう。

「私はここ先上高校の二年皆元慶といいます」

慶は微かに笑みを浮かべながらそう言った。この状況でのその表情は相応していないはずだが、確かにその笑みには人を安心させるような力がある。大西は自然と慶を頼りたくなっていた。

「とりあえず怪我人を治療できる人を知っているのです。そこまで行きましょう」

大西は頷くしか出来なかった。

「…あつちにいる人はいいんですか…?」

大西は渡り廊下の隅でうずくまっている少女を指差して言った。

「あつ…そうですね…ちょっと精神的に参っちゃってますから。お願いできますか?」

なぜか今まで忘れてて、その存在を思い出したように少し困った表情で慶は言った。大西はこれにも頷くしかなかった。

眼帯を外し左目を閉じた寛和藍は拳銃の引き金を引いた。チンピラ二人の内の一人の左太股に銃弾が撃ち込まれる。もう一発右太股に撃ち込む。チンピラはその場でのたうちまわる。理由は簡単だ。このチンピラ達が藍達を殺そうとする未来を予見したからだ。ついでに見えた情報にはそのチンピラ達が能力者である事。赤い髪の方は強能力程度の発火能力レベルスリー。金髪つんつん頭の方は強能力程度の電撃レベルスリー使い（エレクトロマスター）。同レベルの能力でも電撃使い（エレクトロマスター）は応用性の高い能力。まずは厄介な方を始末する

事にした。

(ん？何これ？)

一瞬右目を閉じて、相手の能力情報を左目の未来予知で高速解析しながら気付いた。ほんの数秒だった。

(間に合わないっ！)

気付くのが遅かった。咄嗟に奏音の手を引つ張りながら後方にバックステップした。しかし、それでは間に合わなかった。拳銃を握った右手に焼けるような痛みが走った。実際右手は焼かれていたのだ。拳銃を握っていた指の皮が焼け爛れている。その拍子に拳銃を放り出してしまふ。そしてそのまま赤い髪の毛のチンピラの足元に落下する。

(まさかっ…：広範囲の転移性を持った発火能力だったなんて…：)

バイロキネシス

赤い髪の毛のチンピラは足元に落ちた拳銃を拾い上げる。

そして無言で銃口を藍に向ける。

藍はそれに対処すべく想像できる全てのルートを瞬間的に左目の視野で再現する。

結果…残された選択肢は無かった。藍が死なずに済む方法はあった。だが、それは奏音を犠牲にする方法だった。

諦められない、そう思った藍だったが遂に左目を閉じて右目だけを開いてしまふ。それは諦めを意味していた。

右目に映った世界は絶望だった。

パン。

その筈だった…。

「えっ…？」

現実はず違った。

さっきまで赤い髪のチンピラの立っていた場所には極普通の少年が立っている。一方のチンピラの方は少し離れた場所で倒れ、今まさに立ち上がるようとしている。恐らくはその少年がチンピラに体当たりをして弾道を逸らしたのだろうと藍は推測した。

「ってえ…てめっ！」

見事にタックルされた赤い髪のチンピラは急にキレだした。そのまま立ち上がると手に持っていた拳銃を地面に放り投げ、少年に向かって行く。

「ってお前…それ使わないのかよ!？」

少年は驚いたように言った。

「こんなのはオレじゃねえ！オレはこの拳だけで戦う！」

赤い髪のチンピラは何か吹っ切れたかのように楽しそうに言った。

(…えっ？なにこれ…)

余りの急展開ぶりに藍は追い付いていなかった。奏音はとうとうとすぐ横に銃弾が通過したため立つたまま気絶していた。

そして極普通の少年Aとチンピラの“ただの殴り合い”が始まった。

第5話 戦場の入学式 first proof

第一校舎から出た慶と大西はそれぞれ人を背負いながら歩いていた。慶が背負っているのは大男、大西が背負っているのは少女。だが大西は急ぎ足で歩く慶に付いていくだけで精一杯だった。さらに背中越しに柔らかい感触が常に離れない。

「ちよつとっ…速いですよっ」

先を歩く慶に大西は言う。

「え？」

慶は自覚が無いかのように後ろを振り向いた。

「重く無いんですか…？つて、うわっ！」

大西の体が突然後ろに傾く。別に大西が軟弱で背負っている少女を支えられなかった訳ではない。むしろ逆のようだった。

「…重い？…誰が…？」

先程まで大西の肩に頼り無く、ただもたれていただけの華奢な両腕は今彼の首に巻き付いて後ろに押し倒そうとしていた。今までの状態を鑑みると考えられない力だった。しかも、その少女はまるで亡霊のように、彼女を背負っている大西にしか聞き取れないぐらいの小さな声を発していた。

「どうしたんですか!？」

ちょうど大西の方を振り向いた慶は事態に気付いたが両腕が塞がっているために何も出来ないでいる。

「誰がつ…！」

先程まで大西の腕に支えられていた、その少女の両足が今は腰で支えられている。というより足で腰を押されている。

「“重い”だあー！」

その少女がそう叫んだ瞬間、大西の体は悲鳴を上げた。

「いつ…！」

大西は言葉にならない悲鳴を上げる。

それもそのはず、その少女は体をつの字に曲げて大西の首を引っ張っておきながら腰は足で前方に押し返しているのだから。

「それは…誤解だあ…！」

その少女はとんでもない誤解をしている。そう思った大西は必死に弁明しようとするが、それでもこの状態は変わりそうになかった。

（死ぬう…ほんとに死ぬ…）

このままでは背骨がどうにかなってしまうと思った大西は強攻策を取ることにした。ただ、がむしゃらにこの態勢を崩そうともがいてみる。すると元々安定していなかった状態で暴れると見事にその

少女によって圧迫されていた腰が解放された。

しかし、不幸なことに突然後ろへの力を支えていた足が外れると、当然残りは後ろへの力だけになる。二人は纏れ合いながら後ろへ倒れる。

…。

気が付くと大西の顔が何かにぶつかった。

(ん…何だろうこれ？いい匂い…。やわらかい…？)

「つて！」

大西はガバツと立ち上がる。そこには廊下ではなく、例の少女が仰向けに倒れていた。そして気付く、自分が頭を突っ込んでいたそれに。

「いや…これは不可抗力でしょ…」

そう、これは今廊下に倒れている、この情緒不安定系少女のせいだ。この状況を大西以外の誰かが見ているとするなら否定する者はいない。

「……っ」

海老反りの絞め技をしたその少女は何か言い出しそうでも何も言わずに、ただ顔を少し赤らめ、そっぽを向いている。

「えっ、何か僕の方が悪いみたいな事になってる!？」

理不尽だと思いつつ、大西は目撃者に証言を貰おうと慶の方を振り向く。

「ふふっ…君って結構大胆」

（ええーっ、何その反応！？）

いた。情緒不安定系少女に加担する者が。しかも微笑ましそうに笑っている。さっき見せたような笑顔ではない。

「こ、これは誤解ですよ！」

全力で弁明するも慶はくすくすと笑ったままだ。すると背後から大西の肩を叩く手があった。素直に振り返ったその時、左脇腹に何かが衝突した。その直前、彼の目に映ったのは海老反り絞めを特技とする少女が左足を軸に右足を横薙ぎに振るい、その遠心力のせい、制服のスカートがめくれ、見えてしまった中のものだった。

スパッツだった。

だが、こんなアクティブな彼女にはお似合いだ。

そして、彼が最後に耳にした言葉。

「っこの変態がああーっ！！」

大西が最後の意識で考えたこと。

（冤罪だ…）

「……」

喧嘩中、二名。意識不明、二名。一名の放心状態である寛和藍は今だに状態異状が回復しない。

この場で騒動の終了を告げる放送を聞いた者はいるのだろうか。

- - -
- - -
- - -

全校放送。それ以上に及ぶ放送が町中に流れた。

「…先上高校の皆さんにお知らせします。ただ今、午後12時35分をもって生徒数が120名となったのを確認しましたので、これにて第1回特別実践能力開発^{カリキュラム}及び先上高校入学式を閉式致します。改めて、生徒の皆さん御入学おめでとうございます。新入生の皆さんには先日お渡ししてある資料の通りの教育を保障しますが、それは皆さん次第と心に刻んでおいてもらいたいです。それでは楽しい学園生活を…」

放送は以上だった。それに異常でもあった。

- - -
- - -
- - -

「ははっ！やってくれんじゃねえかあっ！」

そう言った赤髪のチンピラの方が立っていていられているのに比べ、純平はその応答すら覚束ない。

「…は、まだやんのかよ…。それよか何でまたあんな物騒極まりないもの女の子に向けてたんだよ…」

これ以上の争いはただ一方的な勝敗に終わると考えた純平は話を逸らすべく事情聴取をし始める。

「ああ？ああ…えつと何だ…」

立ち上がる純平から目を逸らしながら複雑な表情を浮かべる。その視線はもう一人のチンピラと少女の間を行ったり来たりしている。

「…その…こいつがいきなりそいつに向かって銃を撃って、こんなことになった」

「？」

多少困惑しているのか、指示語が多く、具体的ではない説明をされ、純平まで困惑する。

「えーと、つまり…」

少しあつて理解が追いついた純平は、近くで気絶している小動物系少女を支えている、左目を被う眼帯が特徴的な少女の方に目を向ける。すると、その視線が自分に向けられていると気付くと、二人

の困惑が感染するように顔に表れた。

「えっ、ちよつと！それは誤解っ！」

「いや…」

予想外だった。こうも全員に困惑をされると、どこに原因の矛先を向ければいいか分からない。

（いや、原因は存在する。全ての事象にはそれに対応したトリガーがあるはず。世の中に善意と悪意があるのと同じだ…）

一旦冷静になろうとするも、根幹からアホなせいか善意やら悪意やら全く関係の無い所まで思索が飛躍する。ちなみに純平にはアホという自覚はない。いや、または自分がアホという認識が不可能なのかもしれない。その認識が出来るほど冷静ではいられないからだ。そもそも、この少年Aないしはモブ擬き、妙な特性を数え切れないほど持っている。その微小な一つの特性が発動されて一時的に著しく認識力が低下している恐れもある。

ただ、普段は常識的な一般ピープル。そう連続に妙な行動を起したりはしない。

「とりあえず説明してくれない？」

元凶を究明しない限り物語は進まない。登場人物は常に様々な因果と関係し、必然的且つ無自覚に物語を進めようとし、追究を繰り返す。それは佐藤純平という人間にも言える事には違いない。また、人の行動における一般性は追究の最適化に等しい。つまり彼はこの状況下で最も一般性を帯びた行動をすることで状況を打開しようと

「予知能力う！？中国人も驚きだな…」

眼帯の少女は寛和藍と名乗り、これまでの経緯を説明しだした。しかし、初っ端から純平には未知の能力の存在を肯定する努力が必要なようだった。それは今まで異能の力というものとは無縁に生きてきた彼にとっては難しい事である半面、すでに先程、能力的な現象をその身で体験しているため、超能力の存在自体を認めるしかないということもある。

「中国人って…当たり前前だろお」

そう言ったのは、道端でたむろって喝上げでもしていそうな見た目の少年だ。

「もしかして学園都市の生徒じゃない？」

一つ尋ねて、純平が頷いたのを見ると、短く簡単な受け答えをした。

「いや、でもその予知能力つてのだけど、証拠がないじゃないか。もし、そんな理由が無かった場合の都合の良すぎるバレバレの嘘にしか聞こえない」

予知能力なのに実際には起きていないというのも疑問だったが、それだと他にも疑問を数え切れないほどある。なぜ、拳銃があるのか。本物なのか。なんで、一人足から血を流して倒れているのか。特に外傷が無さそうなのに倒れている女の子がいるのか…。だが、

その疑問を抑えたのは、眼帯の少女…寛和藍がどうしても信じれないわけではないからだ。それを何となく感じているところで、愚かしいかもしれないが、ここでは信用する事でしか状況を打開出来ない。

「証拠…証明でいいなら…。とりあえず20個の数字をケータイに打ち込んで、今から20秒後に見せてみて」

藍は携帯電話を取り出した。純平も頷くと携帯電話を取り出した。

「あつ…バッテリーなかったんだ…」

「じゃあ、これっ」

藍は制服のポケットからも一つ携帯電話を取り出して純平に渡した。

純平は20個の数字を指を折りながら打ち込んでいく。それと同時に数秒左目に掛かっている眼帯を右目にやり、再び元に戻すと、藍も携帯電話に何かを打ち込んでいく。その手が止まった。

20秒。

数を提示した。

53268075216690021951。

驚愕した。二人は同時に数を提示していたのだ。しかも、その数は隅から隅まで同じだった。

「…すごいな」

実際それだけでは予知能力がある事の証明にはならないとも察したが、今、目の前にいる少女が何かを偽る理由が思い浮かばない。だから、そう認める言葉しか呟くことが出来なかった。

「…でもな。そんなことしなくてもいいんじゃないか？」

そう言いながら派手に赤く染めた髪の方を見る。

「お前の口から聞けばいいんだ」

そう、明確な証明が得られないのは、その材料が足りていないからだ。

「正直にいえよ！」

純平は問い詰める。しかし、一方の問い詰められている側ははつきりしない表情だった。

「…あー…あつ！申し訳ないっ！」

「…えっ？何？何その「そういえばそうだった」みたいな表情？！新しい言い訳か何か？それともボケかつ？」

見た目とは裏腹に少しは礼儀というものを知っているのか、藍にむかって頭を下げる赤髪チンピラ。だが、一瞬見せた天然ボケっぷりを見逃すことはそう容易なことではなさそうだった。

「ああ！？こっちは申し訳ないって言うてんだ。それが言い訳？ボ

ケ？ケンカ売ってんのかてめえは！」

厄介な藪を突いてしまったようだ。胸倉まで掴まれてしまう。

（うわっ…何だよこの短気で天然なチンピラ！ほんと何だよっ！）

しかし、得たものは豊富だった。まず、二人のチンピラは運悪く拳銃を携帯している予知能力者を殺しにかかった事。チンピラの方がとても短気で天然である事。

（てか、このままだと顔面にくるって！）

そう思っけていても、迫り来る拳にも時間の流れにも抵抗は出来ない。相手の行動が不意過ぎて、神経反射すらままならない。出来たとしても目を閉じるぐらいだ。

次の瞬間、純平が目を開いた時、その拳は向かうはずの位置には無かった。胸倉を掴んでいた片方の手も別の位置にあった。その二つの拳は何も握らず、開いた状態で純平の肩に置かれていた。

「は？」

「いや…お前には感謝しないといけない。あのままだと本当に殺していたかもしれねえ」

なぜか頭を下げられる。

「感謝するのは別に何とも言わないけど、連れはあれ大丈夫なのか…」

「連れ？…ああ」

(えっ？何その今思い出した的な言い方！ポケか？ポケなのか？連れ、今にも大量出血で死にそうだと思うんだが…)

とツッコミたいが、また胸倉掴まれて殴られそうになるのは御免だと思い、その衝動を必死に抑えた。

「マゾだから大丈夫だろお」

(MA・ZO？なんだ、それは…。マゾヒストのことでいいのか？いや、まさか…)

「マゾ言うな！」

まさかの気絶している本人からの返答があった。今まで視界には入っていなかったので、驚いて振り向く。

寛和藍ではない、もう一人の少女が金髪チンピラの傷口に手を当てていた。

「ほらな」

赤髪のチンピラには見えていたのか自信げに言う。

「ほらなって…あれは…」

もちろん超能力の知識に疎い純平には彼女が何をしているのか想像が及ばない。

「オトリバース
肉体再生かなんかだろお」

「オトリバース？」

「ところで、お前結構ケンカ強いな。そういえばオレ名乗ってないな……。オレは」

途切れた。目の前の人間が突然消えた。どんなイリュージョンを使えばそうなるのだろうか。それが現実起きた事として認識したのは、近くにある体育館の外壁の近くで、赤髪のチンピラがぐったりとして倒れているのを見て数秒だった。

第5話 戦場の入学式 first proof (後書き)

次話で一区切りが終わりです。

この回のサブタイはかなり後の伏線だったり…。

第6話 戦場の入学式 over time 前編

はたして人が一瞬にして、20m程飛ばされる事が起こるのは普通の青春高校生活では日常的なのだろうか…。

頭から血を流してぐったりとしている赤髪のチンピラだが、意識はまだあるみたいで、小さく呻き声が聞こえる。

純平の頭の中では人が飛ばされたという認識が瞬間的に、何かによって人が飛ばされた、それは何か、どの方向からの力なのか、とというような連続的に変換されていく。

力の向きと逆方向にその力の起点があると考えるのは簡単な事だった。そして、無意識的にその方向を見ているのも。

やはり起点はそこにあった。‘いた’の方が正しいのかもしれない。純平から20mぐらい、純平に対して赤髪のチンピラの対称の位置。

人がいた。男だ。体格もあまり純平と変わらないぐらいではあるので、同じ年ぐらいだろう。

ただ唯一、容姿ではなく、何かが人とは異なるものがあった。

殺気。

まるで獲物を睨みつける蛇のような、または銃器や刃物を突き付

けるような。そして、そういった状況での弱者はただ体を強張らすしか出来なくなることは言わずとも分かる。

だから確信した。殺されると。

その男の銀髪が妙に刃物の色と類似している。その男の容姿から滲み出るのは今まで何人も人間を殺してきたという殺伐とした冷酷さだ。

次の一瞬で動けたのが奇跡だと思えるぐらいだ。ある一言が純平の硬直を解いた。

「避けてえええーっ!!」

叫んだ。藍は第二射をその左目で予知していたのだ。

硬直の溶けた純平は短距離走のスタートダッシュの要領で爪先の力を最大限に出して横に飛び込むようにして、その何かを避ける。避けるとその何かの正体に気付くことが出来た。風だ。それも烈風と表現される以上の。

何とか避けられたと思っていると、男の視点が藍に向けられているのに気付く。一方の藍は応戦するためか、落ちている拳銃に向かっている。純平から見ると、藍はそれに気付いているのか疑わしかった。

「危ないっ

」

ゴオ、と凄まじい音を出して藍に向けて射出された局地的な烈風はただ通過しただけで藍には当たらなかった。それは藍が走ってい

る途中、突然止まったからだ。

純平は彼女の能力の全てを聞いていないため、なぜ避けることが出来たのか分からなかった。だが、そんな思考よりも藍の行動は格段に速い。烈風を避けた藍は拳銃を拾い、即座に男に銃弾を浴びせる。

本来なら銃声と共に男から血が飛び散るはずだ。だが、実際そんなことは起こらなかった。弾はなぜか、男の爪先辺りに数発散らばって落ちていて、男には一発も届いていない。

「おい！何だよ、それ！？」

正直、超能力を知らない純平にとって、銃で死なない人間はフィクションの中でしか存在していないものであった。しかし、それがこうも簡単に現実存在に存在してしまった。もちろん、ここは純平の常識が通用する場所ではない。

残弾が無くなったのか、それともただ必要が無くなったのか、藍は拳銃を投げ捨てて、男の方に走りだした。そして、その手にあるのはスタンガンだった。

パチパチと放電を続けるスタンガンは男の方へと向かう。

しかし、それは無謀ではないかと純平は考えた。純平の脳裏にあるのはスタンガンが銃弾同様の結末に至るといふ極当たり前なイメージだった。

そして、そのイメージは必然的な現実として訪れた。スタンガンの行く先を阻むかのようにその進行方向と逆向きの烈風が吹いた。

さっきの銃弾もこうやって阻んだのかと、ようやく目前にある異常現象をそれと明確に認識することができた。だからこそ次に起きた事は純平の予想とは大きく異なっていた。

純平が想像していたのは、スタンガンがただ地に落ちるだけでなく、20〜30m飛ばされ、同様に藍も同じくらい飛ばされて地面に倒れることになるというものだった。そして、確かに実際そうだった。ただ、それだけではなかったということだ。

藍が飛ばされた直後、それは起きた。男のすぐ後ろで爆発が起きた。それは周りのコンクリートの地面を破碎するほどの勢いで男の背中に迫る。

爆発が男を飲み込んだのは一瞬のことだった。

藍がスタンガンを取り出す前に起爆装置が付属した爆薬を男の上の方へと投げていたことなど純平は全く気付いていなかった。ある動作を他の陽動の動作で隠蔽する。藍はそれをやつてのけていた。また、相手が気付いていたとしても、それはそれで藍を爆発の及ばない場所に飛ばしてしまうことで、起爆可能になるという認識が生じて、迂闊に能力を使えなくさせることができるということも彼女の行動の意味に含まれていた。

それら全てを把握できるほどの動体視力や洞察力を純平は持っていない。動体視力における視力については大西の能力付与によって強化されているが、それだけでは足りない。

ただ、そんな純平でも一つ見えることがあった。それはその男が生死の境をさ迷うことになることだ。

…。

しかし、純平の見ていたものは幻想でしかなかった。

男を包み込んでいた爆煙が周りの大気に分散して消滅した。そして、そこに何事もなかったように立つ男は、ついに純平にその鋭利な視線を向けた。

藍は意識こそあるが、20〜30mほど突き飛ばされた先の地面で俯せに倒れている。今、男と純平を隔てるものは何も無い。

全く予想の出来なかったことが今、現実として目の前にある。その現実には未来はあるだろうか。その現実には純平にとって畏怖ではない。死と対面しているようなものだ。

純平の体に訪れた氷河期はまだ終わっていない。純平は動かない足を見て、込み上げる恐怖と直面する。もしくは、これは現実逃避なのかもしれない。目の前にある男の視線から逃れるための。

(俺…こんなんで死ぬのか…。何も出来ないまま…)

震える足を見ながら感じたのは悔しさだった。

世界にはおよそ70億人も人間がいる。文明の発展と共に増加の一途を辿って来た結果だ。そして、今も、これからも変遷し続けるのだろう。その変遷の中で、人はどれだけ死に、どれだけ生まれるのだろうか。そんなことは考えても意味の無いことなのかもしれない。だが、そんな変遷のほんの一部でしかなくなるとはどういうことなのだろうか。そう考えると無性に自分という存在がちっばけで、無力で、なんのために生きて死ぬのか分からなくなる。

純平は思う。そんなことは認めたくない。だから、こんな所でただの歴史の灰になるのは嫌だと。

その悔しさは純平の硬直を解いた。

…動ける、そう思った瞬間だった。

すぐ横を威圧感が横切った。それが空気を振動させ、その振動が純平の耳の鼓膜を破った。

「つうああっあああ!!」

言葉にならない痛みが耳を襲った。

少しして、無事だった片方の耳にドスンと背後で何かが落下する音が聞こえた。

思わず振り返ると、そこには体育館沿いに並ぶ電柱の一つが横に真っ二つに切断されていた。

耳を押さえながら、純平の視線は再び下に移る。限界まで伸びたゴムが突然切れたような衝撃だった…。

静止する自分。

変遷する世界。

破壊する男。

二人の間に広がる世界は確かに純平の日常があった世界に繋がっている。だが、男の生きてきた世界にも通じている。そして今、男の世界が純平の世界の色を変えようとしている。

(やっぱり何もできない…)

これが能力の差というものなのだろうか。結局、何もないことから逃げっぱなしなんだ。そう思った純平の足はとうとう動く兆しすら失った。

男の威圧、世界の壮大。それらに純平の自己認識は押し潰されていく。

……。

…。

。

第6話 戦場の入学式 over time 前編(後書き)

がんばれ、純平！後編は近日中に投稿します。

第6話 戦場の入学式 over time 後編

。

…。

……。

……？

次の瞬間という時間が訪れていた。来ないと覚悟していた時間が、今となって進行している。

なぜ？

純平の瞳は確かに、異なっているようでどこか通じ合っている二つの世界を捉えていたはずだ。

純平の視線はいつの間にか、男の刃物のような視線を辿っていた。

（っ！！）

その先を見て、何か気付いたように純平は周りを見回した。

（考えてもみる…。あいつはいつでも俺や寛和を殺せるぐらいの力はあった）

この場を冷静に見て、初めて誰も死んでいないという事実気付

ける。

(あいつ……)

やっと気付いた。今まで、まともに見てなかったからだろうか…。

男は笑っていた。

戦くほど不敵に。

驚くほど不気味に。

(……………)

そして、その男の視線は一人の少女に収束していた。倒れたばかりの藍の傷を必死に治癒している健気な姿に男は目を付けたのだ。

許せなかった。

死ぬのは自分だけではないことを忘れかけていた自分も。

人の命を弄ぶことを全く厭わない男も。

ただ変わるだけで何も与えてくれない世界も。

「…必死に…人のために頑張ってるやつが報われなきゃならねんだよ！」

元々、死ぬ覚悟は出来ていた。そこには走り出した純平がいた。

直後、男から放たれたのは電柱を簡単に真つ二つに切断するほどの烈風だった。

スッ！ズプッ！

コンクリートの地面に散ったのは少女を庇うように前に立った純平の血だった。

「ぐっう…うっ！」

自分の体が今どうなっているのかも分からず、前のめりに倒れそうになる。だが、純平はそれでも、そこに立っていた。彼女達の世界を守るためには倒れるわけにはいかない。

「…そんなやつが報われない…世界なら、俺がそのふざけた世界を変えるっ！！」

だから純平はその拳を握る。そして、男の方へと走り出した。無心に。

その途中で見た青白く光る雷電や存在感の無い小さな火球はきつとチンピラ達のものだったのだろう。

電気は風の影響を受けないため、男はそれを、能力によって引き起こされる風で自らの回避の躍進力として回避した。火球はその微細さ故か、すぐに風で打ち消された。

避けた先に純平は右手の拳を突きつける。その瞬間だった。男のすぐ肩の上の空間に火が燈った。それが一体どういう意図で発生したのかは純平には考える由もなかった。

ただ、純平にはそのとき確信があった。全く根拠が無い確信が。

この拳が届くという。

そしてその確信は現実となった。

…。

だが、男は顔面を殴られたものの、その不気味な表情は変わらずに立っていた。

…。

…。

「っ……」

地面に前屈みに倒れたのは純平だった。体の限界。純平は、これほどにも当たり前な要因で倒れる自分を滑稽に思った。チンピラ達も限界だったのか、二人とも気絶している。もしくは死んでしまっているのかもしれない。

意識が朦朧とする中、最後に聞いたのは誰かが近づくと音だった。

…。

。

第6話 戦場の入学式 over time 後編(後書き)

お気に入り登録されている方、何だろうなーと覗いて下さった方、いつも読んでくれていてる方、読んで下さってありがとうございます。

やっと、一区切りが終わりました。

ちなみに主人公はまだフツーに生きているので。

とりあえず、次話は話しがけっこう展開していく予定なので、お楽しみに！

お気に入り登録が増えたり、ポイントが増えたりする度、投稿頻度が増していきます。だから、いいと思ったら、どしどしお気に入り登録とかしちやっして下さい。

今、ここまで書けているのは二方の登録者様のおかげです。本当に感謝です。

最後に感想やアドバイスがあれば、遠慮なく下さい。お願いします。

というわけで、これからも「とある能力の存在理由」をよろしくお願ひします！

第一回くへっ別に字数稼ぎじゃないんだからねっ！おまけなんだから！>

本編とは全く関係のない作者の暇潰しです。それだけです。

第一回くべっ別に字数稼ぎじゃないんだからねっ！おまけなんだから！>

奏音「それではあ…。第一回くべっ別に字数稼ぎじゃないんだからねっ！おまけなんだから！>を始めたいと思います！！」

宏平「……………」

奏音「なんで無視するのぉ」

宏平「いや、だって眠いしさ。タイトルふざけてない？色々とツッコみたいんだけどさー、ぶっちゃけ作者が俺のセリフ書くのだから言ってるんだよね。まあ俺ってこのコーナーでは作者の代役みたいな役割らしいんだって。そういうわけだから色々知ってるっばいんだけど…。まあ、説明たらたらするのも面倒だからとりあえず始めてみるか」

奏音「うん。あつ、でもまだお互い名前知らないよねー」

宏平「そっか、俺は西堂宏平。作中では闇の帝王みたいな立ち位置かな」

奏音「病みの帝王？」

宏平「いやいや字間違ってるから。せつかくボケたのにツッコんでくれないどころか、こっちがツッコムことになるとか…。まあ、俺のボケがキレ悪いってのもあるけどな…。ちなみに俺は作者に似てるっばいらしくて、このキレの悪いボケも作者譲りだそだ」

奏音「自己紹介は終わりでいいの？」

宏平「ん？ああ、あと俺の声は坂口大助さんの声を脳内再生してくれとか作者が言ってたから参考にでもしてくれ。あと闇の帝王でも病みの帝王でもないから。それだけかな…」

奏音「じゃあわたしだね。わたしは阿波岐原奏音。声とかは想像にお任せなんだけど、んー他も結構ネタバレになっちゃうからNG」

宏平「これは、もしかやメインヒロイン疑惑か」

奏音「メインヒロインかー。懂れるなあー」

宏平「でも原作「とある魔術の禁書目録」のメインヒロインは空気とか言われてるからな。おまえもなんとか原とか呼ばれたくないんだったらサブヒロインを目指した方がいいぞ」

奏音「うーん。あつ！そういうえば、主人公の佐藤くんかつこよかたよねー！」

宏平「そうかあ。この脈絡の無さ…カノンちゃんは天然キャラか…。CVは花澤香菜さんに決定かな…」

奏音「？」

宏平「まあ、でも口だけだろ、あの主人公。その幻想をぶち殺すみたいなこと言っつて、ボロ負けじゃんか。」

奏音「えーでも、ちょっとキュンってなったよ」

宏平「いやあいつは某上条さんのパクリばっかだ。「ついてない」

が口癖とか隠れた特徴という主人公補正とか」

奏音「もしかして西堂くんは主人公になりたかったの？」

宏平「……………（凶星）」

宏平「ま、そろそろコーナーに入ろうぜ」

奏音「（話そらした…）」

宏平「そう思ったんだが今回は作者パソコンで書いてるらしいからあまり書けないらしいんだ。いつもケータイで書いてるらしいからな。まったく、怠慢な作者だ…。というわけで今回は終わり！このコーナーは今回で終わりかもしれないけどな。それじゃ」

奏音「（うわ…逃げきろうとしてる）」

奏音「読者の皆さん、次回はぜったいいつかあるのでお楽しみに！」

第7話 春に感じる1

たまに考える事がある。

中学時代を思い返してみる。

それと違って何か特別な事があつたわけもなく、ただ時間だけが過ぎていたような気がする。

それ以前はどうだろうか。

…全くもって思い返せるような事はない。

なぜだか虚無感だけが、その後に残ってしまう。

実は本当は何も無くて、自分は…自分の記憶または存在は最近できたものだと考えてしまう。

そんな事は考えたくもない。それは今まで積み重ねてきた‘自分’、というものを否定してしまうから。

だから、そんな虚無感を消すために新たな地へと足を踏み入れた。

だけど、その行動はそんな虚無感を認めて、今までの‘自分’、というものを否定する事そのものではないだろうか。

今までの‘自分’から逃げるためなのではないだろうか。

でも、そもそもその虚無感が実際の無だとすると逃避ではないのかもしれない。

そんな矛盾ばかりの思考がループしている。

いずれか、このループから抜け出して、どこかに到達するのだろうか。

そんな思春期の妄想みたいな答えのない問題に立ち止まっていた。

…。

…！

(…うっわあ、すげえリアルな夢見たなー…)

起きて早々に布団の中で、そう思った。

(…夢、だよな…)

あまりに現実的だと感じたのか、僅かな疑惑が純平の手を胸部に誘う。夢の中でそのあたりを怪我したような気がする。

手の感触が胸部に至る過程で自分が、今、少なくとも上半身裸であることが判明した。が、それは特に気にすることでもない。しかし、それは一種のフラグみたいなものだったと、胸部に至って初めて気付くことができた。

(いやぁー、参ったな。何で包帯なんか巻かれてるだろ…)

冷静になる。

…。

どこだよ、ここ!?

冷静になる?無理だ!不可能だ!出来やしない!

(わけがわからないよ…)

まず天井が違った。ベッドも違う。こんなに大きくなかったはずだ。

(ここは…病院か…)

内装からして病室のそれと判断しても可笑しくない。

(個室って…。何かすごい重症患者が入るんじゃないかなかったっけ)

「まじかよ…。俺の青春生活は!?!」

俺の青春があぁぁ!?!と狂ったように叫んでいると、布団の中で何かモゾモゾと動き出した。当然、いきなりなことでは純平は驚くしかも、それが純平の下半身から伝ってきている。純平の上に掛かる重圧は対したものではないが、どうも下半身も裸のようで、それに触れた感じがすべすべとして、違う意味合いでの重圧を感じる。

「…つわぁ…何だよ！」

そう言っつて、気持ちの悪いものでも確認するように、純平は掛け布団を剥がした。

「！……」

それは純平の腹部から爪先に掛けて乗っかかっていた。純平は仰向けの姿勢のまま頭だけを上げて、それを見つめた。それも純平を見つめていた。

それとは小学生ぐらいの女の子だった。しかも裸。

「…どうも…こんにちは」

(…って、俺は何を挨拶してるんだ。まずいだろこの状況！)

脈絡無しにR18な状況に立たされた純平は混乱。ただ、彼は普通の男子高校生。興奮しても不思議ではない。

(やばい。…いや、これは夢だ)

そう、これは夢だ。気にしなければいい。そう思った純平は再び目を閉じた。

純平は願った。次に目覚めた時はいつもの風景が待っているように。

…。

が、それはとうとう叶わなかった。

未発達な柔らかい体が常に密着しているという感触は消えない。
しかも、

「おい！そんなとこ握んなよ！止める！何のドッキリだよ！」

…まったく、幼いのにアダルトなことをしやがる。なぜか冷静で
いられる純平。彼の隠れた特徴シリーズの一つだ。極度の性欲に達
すると極端に冷静になる。純平はとりあえず、その手をどかした。

「まあ、落ち着けよ。何かの罰ゲームでやらされてるんだろ。誰だ
？こんな小さい子供にこんなことやらせる奴は？よかつたらお兄さ
んに教えてくれよ」

「にゃ…」

（「にゃ」「ってなんだ？そんな言語あつたか？いや、恐らくは何か
言おうとしているのか…」）

純平は「にゃ」から始まる単語を記憶の中で探しだす。

（…そんなんねえよっ！）

爽快な一人ノリツッコミ。

「っておい！なんでまた…引っ張んなってええええ！」

ベッドの上でR指定の付くものを引っ張られる純平。R指定の付
くものを手で引っ張る少女。二人はその勢いでお互いを巻き込みな

がらベッドから落ちる。

…。

一瞬、視界が真っ暗になる。

ガラッとドアを開く音。

「……………」

純平はそこに目を丸めている外人混じりの美人さを持った長身の女性を見た。

彼女は一体何に驚いているのか、その疑問は自分の今の状況を鑑みて初めて払拭できた。

「あ…いや、これは…」

なんとか誤解を解こうと必死に言葉が脳で生成されるが、全てが欠陥品だった。仕方ない。誰がどう見ようと年頃の男子が幼い女の子を床に突き倒して迫っているようにしか見えない。しかも裸…。

「にゃー?」

(くそっ! にゃーばっか言ってないでお前も何か言えよ!)

純平は今だ無邪気にR指定の付きそうな部分を触ろうとしている少女を見ながら思った。

「……………」
「とりあえず離れたらどうですか?」

蔑まされている。冷静に対処されると、尚さらそう感じる。

「とりあえずその子はこちらで預かりますから、ここで着替えて下さい」

「あっ…はい」

はつきりしない返事で、幼い少女を抱え上げ、部屋から出ていくのを見送る。

「準備ができたら、ここを出て右の突き当たりにある部屋に来て下さい」

部屋から出る際に彼女はそう言った。

「あと、そこにいる子には感謝して下さいね。ずっと君のことを看病していたから」

思い出したようにベッドの脇にある椅子に座って、じつくりと寝ている少女を指差してそう言った彼女は部屋を出た。

しばらく素っ裸で立ち尽くす。

.....
.....

「ぐわぁー！わけがわからない。なんでこんなことか！ほんとにっいてねえー！」

…。

「とつとりあえず服を…」

そう呟いて辺りを見回す純平。

壁に沿って探していると、クローゼットらしきものを見つける。

開く。

「……………」

閉める。

「…見なかったことにしよう」

再び探索を始める。

そうしようとした瞬間だった。

「…ん…ん」

今まで、椅子に座っていた人間が起きようとする。それ自体は何も問題は無い。ただ、目を覚まして、いきなり目に入ったのが裸のむさ苦しい男。トラウマになる。

(…どうする?)

全裸のまま平然と挨拶

全裸で「お嬢さん、パンツを貸していただけませんか」と頼む
この部屋から出て、他の場所で装備を整える

クローゼットに隠れて中にある衣服を装備する

(…って何選択肢出してんだっ、俺は！…それよりもどうにかしないと)

純平は無意識的に自作した選択肢の絞り込みを始める。

常識的に考えて最初の二つは変態認定されるという結果になる。三つ目は外に出たところで人がいたら、公で変態認定される。

(…となると、残るは最後か…)

純平はクローゼットを見つめる。そのクローゼットは小さめの部屋かと思うぐらいの収納スペースを完備しており、照明まで付いている、いわゆるウォークインクローゼットだ。隠れるのには申し分のない広さだ。だが、純平は一度その中に広がる光景を忘れようとした。忘れなければならなかった。そこにあったのが女物の下着群だったからだ。

(もし見つかったら変態どころじゃないぞ…)

純平はただの男子高校生。興奮しないわけがないが、過度な興奮は逆に純平を冷静にさせる。だが、興奮していようと冷静でいようと、女性の下着の前に男の裸体を見れば、通報は免れないだろう。

(いや、見つからなければいいだけだ)

そう決心した純平はスライド式のクローゼットの開閉部を開いた。

開閉部を閉めて照明を付ける。そこに散乱しているのはやはり女

物の下着ばかり。そして、純平の興奮は一定のラインを越える。

「そこからは不可逆だった。」

.....

「.....！」

俯せで倒れている藍とその藍に手を添えている奏音。その前には胸の辺りを大きく抉られた佐藤純平の姿があった。

「ぐっう...うっ！」

男の風の刃は心臓やその他の重要な臓器に達するどころか、それらの臓器を潰し、周辺の地面に肉片として飛散させていた。辺りに落ちていた臓器の破片自体はまだ死んでいないためかピクピクと僅かに動きが見える。それを見るだけで目の前に立っている人間が死体となつていと判断できる。

「...そんなやつが報われない...世界なら、俺がそのふざけた世界を変えるっ！！！」

だが、藍の判断は誤っていた。彼は生きていた。藍の脳裏には事実とは裏腹に逆説ばかりが過ぎる。彼に流れる血液は今どうやって流れているのかなどの常識的な疑問。

(いや、最初来たときも...)

思い返す。チンピラ達に襲われたとき、死という予知は佐藤純平

というイレギュラーが現れたことで打ち砕かれた。藍の能力は決して他人の干渉を受けない。能力の誤作動というのは考え難い。一度もそんなことは無かった。考えられるとしたら…

(同能力者か…？でも、じゃあ今のこの現象はどう説明すればいい？)

予知能力者でも特定の能力者でしか変えられない絶対的な未来を覆す。生命維持のために最低限必要な臓器をほとんど失ってもなお言葉を発することができる。少なくとも、この二つを満たす能力…

(そんな能力…)

思い当たるわけではないが、学園都市の第七位、削板軍覇は説明のできない様々な現象を引き起こしているのを見たことがある。それと類似している能力なのだろうか。もしかしたら、この二つを満たす能力は学園都市にあるのかもしれない。あらゆる異能の力を打ち消す幻想殺し(イマジンプレイカー)という原石もいるぐらいだ。学園都市にはまだ多くの隠された能力があるのだろう。

(だけど、これぐらい特異だと原石は確定ね…)

今はこの未知数の能力ちからに頼るしかないと思った。

純平は男に殴り掛かっていた。

藍はその無謀さに呆れるが、反面その拳が届いて欲しいとも思っていた。その瞬間だった。男の肩の上辺りでチンピラパイロキネシスの発火能力の炎が現れていた。

(…やるじゃない！)

上昇気流の発生に伴う気流の乱れ。赤髪のチンピラは気圧の差を利用して少しでも烈風の壁を弱めようとしたのだ。

(これなら！)

鈍い音がする。そして、もう一つ。

奇跡に頼っていたのかもしれない。それほど窮地を作った男だけがそこに立っていた。そして絶望と共に彼は倒れている純平に歩み寄っていく。負傷した体で藍は身動きができない。チンピラ達は能力を使っていないことから、気絶しているのだろう。そう推測する藍は、半ば諦めていた。

藍はその“今”を見る目すら閉ざしてしまう。

…。

「やめてー！ー！」

…。

だが、彼女の、藍の聴覚はそれを許さなかった。聞いてしまった事実を否定はできない。

藍の右目が開く。

そこには血まみれで生きているかも分からない人間を守るように立つ奏音がいた。腕を目一杯に広げ、少しでも大きくあろうと必死

になるたった一人の友達がいた。

その必死の思いと反するように、男は右手の掌を奏音に向ける。それを見て、その男の能力をやつと理解する。今まではまともに見る隙すらなく、確定するに至らなかつた。

風力使い（エアロシューター）、大能力者、レベルフォー限りなく超能力者に近い。体のあらゆる部分に触れた物体に風力の噴射点を作ることができる。噴射点が小さければ小さい程、風力は強まり、かまいたち鎌鼬のような烈風の刃を発生させることができる。少ない情報量で可能な限り、正確且つ多くの結果を導くのは藍の“今”を見る右目の洞察力。様々な経験を積んだからこそできる所業。

だが、そんなことが“今”で分かつても意味が無い。男の二発目の烈風が純平に迫る直前、藍は一度ならず十数回も左目の能力で彼の能力を分析しようとしたが、まともに見れたのは今の時間軸上のパターンだけだつた。それ以外が能力の無力化、つまり藍が即死する未来だつたためだ。その際の情報量が十分であれば、今のこの状況は少し良くなつていたかもしれない。

事態は手遅れだ。

すでに藍の体は動こうとしない。

無理矢理動かそうとすれば立てる程には動けるのかもしれない。だが、実際動いていない。きつと心の片隅に諦めがあるからだ。

…。スパツ！

何かを裂く音。

。地面に落ちる音。

倒れたのは銀髪の男だった。

この場に立っているのは奏音と…。

風力使い（エアロシューター）の男が倒れた先に一人の別の男。

玄黒。

その髪の色も瞳の色も、全てを飲み込むような深黒。その雰囲気も同様、畏怖なものになぜか引き寄せられる感じだ。藍はAIM拡散力場が干渉されているのかと疑う。

よく見ると、その男の右手には太刀の柄が握られていた。その太刀を納めるための鞘も腰に掛けられている。その逆側には対称的に西洋剣が掛けられている。その対を携える男を何かに例えるのなら、百戦錬磨の武士…騎士でもいい。彼から連想されるのは、自己を確立してこそ得られる強固な遺志の集合体…全てを覆すような英雄的な強さだ。

銀髪の男が倒れているのは太刀が抜刀されていることからその男が何かしらしたのだろう。ただ藍が疑問に思うのは、その刀身に一滴の血も付着していないことだ。

（峰打ちで気絶させるなんてマンガの世界じゃあるまいし…。そもそも、あんな目立つ物騒なもの隠しようがない…すぐ銃刀法違反で通報されるわよ…。そもそも、どうやってあの烈風の壁を破った…

?)

触れた瞬間、その物体に空気の噴射点が生じて、その本体に届くこと無く、刀は粉碎されるはずだ。

色々と思考していると、いつの間にか、その太刀を鞘に納めて、銀髪の男に手を当て…二人は消えた。

(…空間移動能力者?)
テレポーター

突如として訪れる静寂。

藍の意識は朦朧としていく。

第7話 春に感じる2

下着の山を見つめる純平。その様子は冷静だった。冷静なのはきつとクローゼットにいる間ずっと続く。

「あれっ!?!いない?」

クローゼットの外ではいるはずの人物を探し始める声。

(考えてみれば、怪我人がクローゼットに入っているなんて思わな
いだろ…)

冷静になった純平はそう考えたが、

「クローゼットかな?」

一番にクローゼットを探すという謎行動によって、その予想は覆された。

とつさに近くにあった工具箱を戸が開かなくなるように移動させる。そのためにあるかのように工具箱は戸の可動性を無くした。

「あれえ〜、あかない…」

微動だにしない開閉部は彼女を足止めしてくれた。だが、それは一時凌ぎでしかない。

純平は照明で照らされたクローゼット内を見渡す。辺りのハンガーに掛けられているのは明らかに女物の衣服ばかりで、中には見て痛い、いわゆるコスプレというのものもある。一番奥にある棚まで女物だった。

(ん!?)

棚と壁の間に挟まるようにして存在したそれは…

(あれは…まさか超機動少女カナミンのステッキ!)
マジカルパワー

説明しよう!カナミンという少女はある魔法のステッキに念じるだけで学園都市が持つ超科学の集合体:超機動少女になるのだ!そして、今日も超機動少女は学園都市の平和を守り続ける!この物語はフィクションです。という学園都市製のテレビアニメである。純平はどこかのテレビ番組でその超機動少女カナミンを見て知っている。

(このステッキを持って念じれば…俺も超機動少女に!?)

そう思った途端、下着の山から声が聞こえた。

「念じよ、さらば拓かれん!」

「うおっ、神の声!?!下着類の精霊か!?!」

「誰かいるの?」

思わず声を出してしまい、気付かれてしまった。

(このままじゃ、まずい！)

純平は棚と壁の隙間からステッキを引き抜いた。そして唱える。

「マジカルマジカル… パワード、自分だけの現実をフルチャージ
バーンナルリアリティー
！！」

変身の呪文を唱えた瞬間、異空間に飛ばされ、光が純平を包み込む。その光は純平の体の輪郭を包むように覆い、その体の輪郭は一瞬にして女の子のそれになる。そして、少しずつ部分的に完全自動で着替えさせられていく。

光が鎮まる頃には、純平はどこからどうみても超機動少女になっていた。

「体も…えっ声まで変わるのっ!?!」

自分の変容ぶりに驚くが、彼女にはすべきことがある。

クローゼットの戸を勢いよく開ける。

その先に広がるのは悪の科学結社の巣窟。彼女の使命は学園都市の平和を守ること。

「わたしは超機動少女ジュンコ マジカルパワード ! 今日も学園都市の平和を守るわ
！」

…。

(んなわけあるかあ！！)

純平は実際にはステッキを引つ張り出してはいなかった。

(このままじゃ、やばい！)

そう思った途端、下着の山から声が聞こえた。

「念じよ、さらば拓かれん！」

「……」

これは神の声でも下着類の精霊でもない。神や精霊、そんなものは存在しない。ならば、これは人の声だ。

純平は下着の山を剥がしていく。

(この山を拓いてやるよっ！)

下着を退かし終わると、そこには一般的な学生服にワイシャツの上に臙脂色のパーカーを着用していて、いかにも「僕は今時の少しチャライ系の学生の模範です」的な男が小さく何か呟きながら寝そべっていた。

「念じよ、さらば拓かれん！…ねんじよ…さら…ばひから…」

(寝言か…)

…。

冷静になってしている純平にとって、女性の下着の下で寝ているこの男は変態にしか見えなかった。

…。

見事に純平の方が変態だった。

(うあああああああああ！！)

寛和藍は今日も左目を白い眼帯で覆っている。彼女がいるのは真昼の屋上。あんな陰惨な昨日があるのに、空はそんなこともお構い無く快晴だった。

昨日ないしは20時間ぐらい前だろうか、一人の少年が藍の前に現れたのは。そして、様々な疑問が生じたのは。

いや、疑問なら、とうの昔から抱いているはずだ。この瞳に宿る能力…。

どうしてか、この予知能力というものはかなり特異らしい。能力者が云百万という学園都市内ですら指で数えられるぐらいの稀少ない未来までも見ることが出来る唯一の存在。それは従来の予知能力

とは異なる。予知能力とは通常、ある一つの未来を見て、それに全く抗うことも変えることも出来ない。だが、彼女の場合はそれが可能であるし、それは一定の範囲内の運命を別の全く180°違った運命に書き換えることができるということでもある。

藍は学園都市の出ではある。だが、彼女は能力開発カリキュラムを受けたことが生涯一度もない。彼女のその能力は突如何の前触れも無く発現したからだ。元から発現してしまっただけでは開発するものは無くなってしまう。だから、彼女に開発は必要なかった。それに、その機会さえ無かったはずだ…。

人はそんな天然でイレギュラーな能力者を総称して…“原石”と呼ぶ。

藍は、その原石がなぜ自分であるのか、そしてその存在理由は一体何なのかという問いに対する答えを能力発現以来ずっと考えていた。それが一つ彼女が抱いている疑問。

そして、そういつた疑問を増やしてくれたのは、この学園と佐藤純平という男の出現だった。

昨日のその少年の行動もその過程で起きた様々な奇異。自分だけの能力である限り、その能力に直接干渉する存在は無い。それなのに、藍の見ていた未来は彼の存在が原因となって別のものに変わっていた。それに、予知能力ファレシジョンで見た世界で、彼の行動だけがモザイクがかっていた。いや、明確には見えているはずだが脳で処理出来ていないというのだろうか…。

藍の左目を通して、佐藤純平という存在は実に儂げで謎に満ちた存在だった。そして、その先を知りたくもなった。それは知的欲求

などといった表現できるものではなく、その真相が自分にとって新たにできた、この左目の能力ちからの存在理由を導き出してくれる鍵だと思っただけだ。

(でも、詮索は後ね…。今はこの施設のことを優先して調べないと…)

施設：藍はそう呼ぶ。形式上では先上高校と呼ばれるが…。昨日中で彼女の知ったこと踏まえると、その表現は見当違いではない。

昨晚

気が付くと、どこだか分からないベッドの上に寝かされていた。

「ん……」

そうか、と自分が意識を失っていたことをすぐに理解する。

体力には自信のある藍だが、さすがの彼女も誰かを庇いながらの逃走に引き続く、戦闘による負傷と能力の著しい使用には耐えられない程度の常識的な体力を持ち合わせているようだ。

(暗部が長いっていても、やっぱり女の子だからね…)

悔しいわけでは無い。中途半端なまま倒れてしまった自分が情けないだけだ。初めてできた友達を守ると誓ったはずなのに。

ただ、それとは別に藍は倒れたはずだ。その事実は揺るぎ無く真実であるのに、なぜかピンとこない。あの場面から如何に今の状況に繋がるのだろうか。

…。

上半身だけ起こすと、部屋の全貌が見渡せた。見える限りでは至って普通のLDKだ。学園都市にある典型的な学生寮の一室みたいな。家具は本当に最低限のものがあるだけだ…。

藍は現時刻が気になり、携帯電話を取り出して、時刻を確認する。

(8時…もう夜か…)

確か意識を失ったのは午後1時か…。藍は、その間に何が起きていたのだろうかと思った。だが、その前にここがどこなのか知るのが先だ。

藍が外に出ようと、立ち上がるうとした時だった。

「あれ？もしかして起きたー？」

誰もいないはずだと思っていた部屋に声が響いた。発生源は恐らくキッチン。キッチンはリビングである藍のいる部屋と実質ほとんど繋がっており、その二つを隔てるものといえば、下部の収納を含むシンクやガスコンロぐらいしかないはずなのだ。つまり…誰もいないはずの方向から人の声が聞こえているということだ。

「えっ！幽霊…！？」

クールビューティーと言われても可笑しくない彼女から、その容姿や性格とは程遠い弱気な声が出る。

…ここだけの話し、彼女は幽霊という架空の存在を嫌っている。嫌っているからこそ敏感に反応してしまい、不可解な現象を霊的な何かと勘違いしてしまい易くなる。もちろん、藍の勘違いだった。

台所からひよこつと出て来たのは身長130ぐらいのようじよだった。

「ゆーれいとは失礼な！ぼくはれっきとした生身の人間だよ」

その小学低学年ぐらいにしか見えない容姿で、腰ぐらいまで伸びた綺麗な亜麻色の髪を揺らしながらチヨコチヨコと近付いて来る。

「なんで皆ぼくのことを人間以外の……」

その途中で何かぶつぶつと呟いていたが、藍の下もとに着くや否や、

「まあ、でも……。ようこそ！先上高校へ！」

そう言った。

通称モブ系男子…西堂宏平は校庭でエンジン部分を両断されて撃墜された軍用ヘリヤ「ラージウエポン」と呼ばれる駆動パワードスツ鎧の残骸を見つめて佇んでいた。彼が皆元慶に依頼された仕事は、その彼女の使用していた物騒な武器の回収作業だった。

西堂はハルバードと呼ばれる矛先近くに斧状の刃を備えている槍パワードスーツが駆動鎧の断片に食い込んでいるのを見つけると、それを力強く引き抜いた。

「つよつと…お?」

もちろん、簡単に外せるわけもなく、外した後の力を全身で支え切れず、バランスを崩して、地面に手をついてしまう。

「うわっ…」

地面に手をついてしまったことに僅かな敗北感。

(なんて言うか…よくこんな重たいもん持てるな…)

立ち上がって両手で持ってみると、それが実感できる。

(てか、この重量を投げるって人間技じゃないよなあ…)

実際、その重量は大の男が両手で持っているのが限界なぐらいだ。

「さて、電話電話つと…」

慶の現在位置を把握するため、西堂は慶に電話をかける。

……………。

「でないな…」

これでは合流は難しい。

「どつすっかなあ……」

体育館裏　　。

携帯電話が小刻みに振動した。だが、それに気付くことなく皆元慶は眼前にある光景を見て、立ち尽くしていた。

腰を痛そうにしている大西と少々苛立ち気味のボーイッシュな少女も、立ち尽くし沈黙するしかなかった。

そもそも、彼または彼女達がそこにいるのも必然ではあった。慶は怪我人を手当てる場所があると言つて、慶達はその目的地に行く途中だった。その途中で遭遇したのだ。

電柱は物の見事に切断されており、コンクリートの地面は所々抉られている。

…そして、何よりも目立ったのはそこら中に飛散した鮮血と、まだ僅かに動きのある肉片…。それが最も集中している所に彼は俯せに倒れていた。その少年の周りには血だまりができていて、その血だまりの上で一人の少女が彼の体に手をかざしていた。

慶にはその少女が具体的に何をしているのかは分からなかった。

だが、何をしようと、何がしたいのかは伝わった。彼女が救いたいもの…だが、それはきつと不可能だ…。そう考えた慶だが、その少女を止めようとはしなかった。

その前に慶にはすべき事がある。

もう一度、辺りを見渡した。

体育館の外壁にもたれる形でぐったりと倒れていたいる少年や、太股から血を流して倒れている少年、特に目立った外傷は無いが倒れている眼帯を掛けた少女。彼らにはまだ生存の可能性を大いに感じられた。助からない命に構っている余裕はない。

慶と一緒にその光景を見た二人は吐きそうなのを何とか堪えたものの、どうも現状を受け入れられていない様子だった。

だから、慶はこう言う。

「さて、あなたたちがすべき事は何ですか？…そこにある体育館倉庫…そこまで」

きつと、理解^{わか}ってくれろと信じて発した曖昧な言葉が二人の心情を動かす。

第7話 春を感じる2（後書き）

今さらですけど、禁書祝映画化！！

それと明後日10月27日超電磁砲7巻発売ですね！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2577u/>

とある能力の存在理由（レーゾンデートル）

2011年10月25日01時05分発行